

村野次郎創刊

# 香 蘭



2023年(令和5年)5月号

第100卷

第5号

通卷1109号

二〇二三年(令和五年)五月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第一〇〇卷第五号



# 香 蘭

2023年(令和5年)5月号  
第100巻 第5号 通巻1109号

## 目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(93) ..... 平川良枝 : 表二  
作 品 ..... 2

一 ..... 20  
二 ..... 27  
三 ..... 34  
推薦香蘭集 ..... 35  
香 蘭 集 ..... 39

一頁公論(24) 人生一〇〇年 ..... 川原優子 : 13

特選 作品一 (三月号) 渡辺礼比子選 九名 ..... 14

特選 作品二・三 (三月号) 千々和久幸選 九名 ..... 16

村野次郎への旅(157) ..... 千々和久幸 : 18

七首抄(三月号) ..... 工藤・黒羽(絃)・原(礼)・福本 : 39

私の読む現代短歌(19) 新風を吹きこんだ上野久雄 ..... 田中あさひ : 40

焦 点(三月号) いつもの場所を歌う ..... 桜井京子 : 42

作 品 評(三月号) 作品一 ..... 朝香ふさ枝 : 44

作品二 ..... 牧野道子 : 46

作品三 ..... 小林ますみ : 48

香蘭集 ..... 近藤美知子 : 50

耳言あれこれ(18) ..... 田中あさひ : 52

緑 地 帯 ..... 和田・大里・市川 : 53

明宝研究会第一三七回 二月例会 歌集評とは何か(加藤・千々和对談) ..... 56

他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向 ..... 74

歌会及び会合・会員消息・他 ..... 77

編集後記・新宿日記 ..... 81

令和五年度香蘭賞作品募集 ..... 表三  
表紙絵 : 中村 陽子「春ひかる」 目次・緑地帯カット : 和田 和雄

# 太古よりしじまを保つ深き谿立ちて

## 臨めばわれを誘ふいざな

『樗風集』

昭和七年八月から十二月、村野先生は北・中米を歴遊されている。先生の略年譜によると、船中より無電にて作品を送られたとのこと。多くの地域を巡らている中で、グランド・キャニオン展望の歌が特に多い。昭和初期に先生は、どのような手段でこの場所まで移動されたのであろうか。私がここを訪れたのは、およそ五十年も後のことだが、小さな七人乗りの飛行機だった。

どこまでも続く赤茶けた色の深い溪谷は鋭くごつごつとしており、その溪谷がつくられてきた長い長い年月と遥か下方に見える河、何と言ってもいいか表現できない自然の偉大さに驚いた。先生の歌から「太古」「しじま」「誘ふ」という言葉が繰り返し私の脳裏をかすめる。谷底に引きずられそうで、怖かったことを思い出す。この歌を携えてグランド・キャニオンの岩山にもう一度立ちたい。

(短歌新聞社文庫『樗風集』59頁。『村野次郎三百首』には収録されていない)

## 四 選 者 の 作 品

神のくしゃみ 平塚 千々和 久 幸

詩の神も多忙ならんよ身を揺すり呼べど待てども詩の降り来ず  
詩がわれに降りてくるまで戸を開き神のくしゃみを待ちておりたり  
ただならぬ気配を受感せしのみ神の言葉は塵に紛るる

さらばとう声を背後にノート閉ずあれはしんじつ神であつたか  
間なくして神は消えたり書きかけの詩を抱き暗き戸口に立てり  
運のなき詩人よと神に同情をされ人間の輪に戻りたる

知に遠き明け暮れなると詩に記して皺の寄りたる首筋を撫づ  
他人の死なれば妻の死もありふれた雑事雑用のひとつならんよ  
しろがねの鍵 横 浜 渡 辺 礼比子

たずたずとキラキラ星を歌う子よゆつくり大きくなればいいから  
公園の落葉の中にしろがねの鍵紛れおり 一月のゆく  
わが里に居候して庭先に苺植えくれし叔父さん逝けり

きようだいを代表し葬に行く兄に礼を言いつつやや改まる  
乱世に背を向け定家の纏めたる青表紙本源氏物語  
〔青表紙〕に執せし定家語るらく「紅旗征戎吾事に非ず」

六本木ヒルズ冬日に煌めきてむかしなじみの露地が消えおり  
大江戸線六本木駅しばしばもアバンギャルドな人乗り降りす

感謝の会 鎌倉 高 島 憲 子

冷たいわ、温かいわと交ごもに師の手を握る感謝の会に  
一同の感謝の花東ロゼ色は今日の先生のセーターの色  
三十年の思ひは深し先生の「短歌を長くお続けください」

足跡のなき雪原にゐるごとしこのあかときのひとりの時間  
事多き年を行かせて迎へる大き初日のまぶたに温し  
次郎作ひよどりの歌を墨書せり受けし役目の始まりとして

筈はもう掘らないでと父に言へば掘れないと言ふ呵呵と笑ひて  
連合ひの逝きし年月日すらすらと言ふ父に介護認定下りず  
青りんご 我孫子 丸 山 三枝子

この辺に蠟梅ありしと手賀沼の畔をくればああ香りくる  
二十円値上げしている青りんご買って帰りぬ買いに来たから  
娘一家きて息子きて納骨のはなしの前にワイン開けたり

むかしから好き嫌いなき娘だがだから丈夫というにも非ず  
禁煙を太郎にさせる作戦のはじまり太一に質問させる  
ぶつかりそうになつてはついと身を躲す槽のエンゼルフィッシュも必死

外食に行くまえワイン四本を五人で空けてしまひたりまた  
さえざえと織月かかる下にきて手を振り別れそれつきりなり

# 作品一特選



(三月号作品から)

渡辺 礼比子 選

歳末雑記

川崎 飯島 智恵子

何もかも値上げ値上げの年の暮散らし広告まとめて捨てる  
どの道を行きても此処らは坂ばかり坂に名のなきこと快し  
下り坂 暗闇の坂その先に黄泉平坂待ちかまえている  
人の住まずなりて三年地縛りの伸び放題が草紅葉する  
硝子戸を透かし小鳥の影うごくわが広げ読む新聞のうえ  
プーチンとゼレンスキーの憂い顔見せられ終る令和四年が  
・軽やかに詠まれている歌の背後に作者の無常観が見え隠れする。  
ハニーカフエラテ 習志野 石井 雅子  
色づける葉をつぎつぎと落としくゆく木々は晩節汚すことなく  
鋸と刈込銚しまひには電気ノコギリで根元から切る  
山茶花の紅きが咲くを剪定を頼みし植木屋ながめてをりぬ  
薔薇園の秋のひと日のテラス席ハニーカフエラテ蜜蜂も来て  
火の酒を飲めぬ私は骨までも蕩ける恋して燃えてもみたい

吾と共に捨ててもらふしかないか もう断捨離に挫折してゐる  
不機嫌な店員のラッピングする花束を待つ 不機嫌に待つ

・最近ますます脂の乗ってきた作者。六、七首目の一字あけが効果的。

摩訶不思議

川崎 伊藤 美恵子

平日の墓地の静かさ温かさ無数の死者に迎え入れらるる  
明るくてほのかに心温まる挽歌を見たり香蘭誌上に

寸分もいつもとかわらぬ夕暮れにきみのあらざるこの摩訶不思議  
十五年会わざる友より届く蘭お寂し見舞いと言葉添えられて  
モーツアルトの明るさすなわち寂しさを知りしは夫を失いてより  
癌になるかも知れないと医師の言う(かもしれない)に切られてはたまらぬ  
双子座の流星群を長く見て年の瀬首に膏葉貼るなり  
・夫没後の喪失感を未知の感覚として捉え、新たな歌境を開く。

歌 会

東京 伊藤 康子

先生の息つぎぬくもり感じてるリアル歌会がやっぱり一番  
歌わるる素材の話に盛り上がりみな発言し歌評へ戻る  
焼き芋にのせたバターの溶けてゆく霜月歌会の熱気あふれて  
手続きのウェブ化で新パスワード次々決めて次々忘るる  
手帳には呪文のごときメモ残りどのパスワードぞ文字が笑えり  
パイプ椅子並ぶワクチン会場の脇に輝くクリスマスツリー  
・歌会の様子がリアルに描かれた二首目、ウェブ化と闘う四首目がいい。

冬至の日

尾道 柏原義清

早起きしせてみて日を長くせん今日は日みじか冬至の日なり  
日短き冬にてあればせめてもと部屋奥まで陽は射し込みぬ  
赤い首輪付けた黒猫保護したと防災ラジオが知らせてくれる  
捨て猫が鳴いて居ること鳥畑に悲しげに鳴くあれは海猫  
通学路に食堂、八百屋、文具店、金物、桶屋どれももう無し  
通学路に様ざまな小売店ありき消えて今ではスーパーに行く  
・変わらない自然を愛でつつ、変貌していく鳥の生活を歌に刻む。

うたた寝

川越 川原優子

枝先に残る枯葉をことごとく落としてゆけり師走の風が  
踏ん張って生きております吊り革を握りて今日も電車で揺られ  
元氣よく離婚しましたと告げられてその元氣さをふつと危ぶむ  
星条旗の星の数だけ意見ありトランプ好きのまだまだ多し  
孤独死と無縁とは言えずひとり居のこの身しばしばうたた寝をする  
とりたてて逸る心なきクリスマススイブに出かけてワクチンを打つ  
・ひとり居の日々を遠観し、自然体で過ごす。二首目のユーモアがいい。

冬

西宮 鈴木桂子

人をさげ人ごみをさげ世をさけるさうしていまを生きのびていく  
生きてゐると何かのためになることもある、と信じてがんばれきみも  
朝九時に起きても何も言はれない何ゆゑのこのうしろめたさよ  
去年の冬義母見送りし友なるを今年の冬は友亡しすでに

道元坂下交差路において来たわれを迎へに行つてはくれぬか  
暗きより最終電車のあらはれてまぼろしのごと人を降ろしぬ  
冬空に星の流るる夜半にて恍惚と咲くマリーゴールド  
・厭世的でありながら、その時なりの表現を模索する姿勢を見習いたい。

前向きに

東京 土井紘二郎

前向きに生きると言へば褒めらるる振り向くことの許されなくて  
ほんたうの夫婦になるまで五十年遠回りしてたどりつきたり  
また一人寡男かぞふる身のめぐり妻の元氣をふと怖れたり  
幾たびも目覚める夜長あけまでをぐつすり眠る体力が欲し  
晩節と焼きおにぎりはこがすがいいのたうちまはつて死ぬもよからう  
飛び乗つた朝のラッシュの一号車女性専用車両の眼まなこ  
農園の大根、キャベツをご近所に分けて今年の畑終ひせり  
・老境を迎えての日常を描き、随所にびりりと諧謔を効かせた一連。

師走 尽

横浜 長野道子

葬りまで十日余りを冷凍のロッカー三番に友は眠りぬ  
バイオリンの弦が切れそうに見えるたる友の弾きたる『チャルダッシュ』は  
がつくんと筋肉量の減りたれば歩くたびごとと号令がある  
かたわらに花鉢ある暮して花の代わりの花あるごとし  
咲き残るバラに会うため約束をしたることくバラ園に行く  
黄昏の夫のメールは「すみません、遅くなります」コロナ下なれど  
・一首目は感傷を排して詠まれた悲しみ深い挽歌。三首目にエールを。

# 作品二、三特選



(三月号作品から)

千々和 久 幸 選

## 〈作品二〉

空っぽになる

さいたま

丑 山 眞 弓

世の中のすべてがスマホに納められ頭の中は空っぽになる  
忘れてはならない事を忘れゆく忘れたい事忘れられずに

配達の青年おもわず愚痴こぼしその時だけの母になりたる  
近隣の婦人と始めた朝散歩足きたえつつ口も鍛える

さえずりはチツと一声その後の姿は見せず夕日さす庭

冬の日に咲くあさがおの水色を寄せてながむる日溜まりの中  
・アイロニカルなウィットが微苦笑を誘って読ませる。

友はいつでも

鎌 倉

高 田 みちゑ

深夜まで話して受話器を置く時に友はいつでも「さよなら」と言ふ  
あなたとの最後になるかも知れぬからやはり言ひます「さやうなら」  
「さよなら」が夜の静寂しじまに吸はれゆきまた暗闇に返るその時

水訣わかれの日の悲しみ癒えずひそみゐて不意に湧きくる海見ゆる時  
いつの間に雨降りたるか濡れてゐる舗道は黒く光放てり  
のちのちに如何にか伝はるこの時代いかなる記憶として残るやら  
・「さよなら」「さやうなら」を掘り下げてみせた四首の意欲を買う。

QRコード

千 葉 竹 本 幸 子

年の瀬のにぎわう街の片すみに「フードバンク」の幟はためく  
点滅の電灯今にも切れそうで正体不明の不安がよぎる

読み取ればQRコードは万能なりスマホかざして明日が見えるか  
大雪に何百台も立ち往生テレビは映す毎年のこと

近頃は「仕方がない」と諦めてあきらめるたび気楽になりぬ  
車窓より紅葉見つつ気になるは「ラ変動詞」の接続のこと

・五首目、経験が育んだ生活の知恵、これでひと回り人生が豊かになる。

向こう百年

取 手 田 中 あさひ

三枚のマスクを壁としてあゆむ三年ぶりなる新宿駅を

ミサイルの飛びこぬ町に冬を越す鴨なれど空を裂くこゑ

寺田さんの《持てる悩み》を聞いてゐる隣の空地の草刈りに来た

民主主義は困つたものだと嘆いたと結社の或る日の編集人は

ポケットにしまっておかう冬空のわれを見つめるまんまるの月  
マニキュアを塗らず同窓会に行つたこと悔いるだらうな向こう百年

・瑣末なことを詠んで、滞りのない詠みに力量を感じる。

朝の道 さいたま 松沢 みどり

ポーナスが史上最低額ですと部長は告げる皆を集めて

すぎ焼きはアメリカ産の豚肉にしようとする主任が明るく笑う

人が減り組織が変わって任される仕事量のみ増えていくなり

誰の目も気にせずコーヒー飲んでる一人で過ごすスターバックス

日曜の午後に射す陽のぬくもりを生まれ変わっても覚えていたい

自転車漕ぐ朝の道コンビニのあんまんで暖をとりつつ急ぐ

・関連な女性社員の日常が明るく活写され、どの歌にも勢いがある。

### 〈作品三〉

初雪 島根 澤田 久美子

暁あかしぎの空よりひとつふたつみつ ニンフのやうな初雪が降る

さし伸ぶる手を避けて舞ふひらひら一片は人間嫌ひの雪かも知れず

町の上へを今日も動かぬ雪雲の間に見ゆる青空を恋ふ

ひっそりと直立不動 雪の日の道の駅なる丸いポストは

歳晩の街が異郷のごとく見ゆ粉雪をどる茶房の窓に

・柔らかな感性で光景を比喩化して捉えた二首目の人間観察が面白い。

才なり 鎌倉 河野 慎 二

止められぬ性こそ才なりわたくしの家の便器はけさも輝く

近寄るな話しかけるな笑ふなよ前歯のブリッジが落ちてしまへり

雨やがて晴れの子報を信じてた彼とわたしの夏の日の夢

わたくしの踏みゆく枯れ葉の音だけが立ちぬ真昼の尾根道行くに

その理由わけは胸に仕舞ひぬクリスマスツリーに吊られし天使の心

・二首目は表層の面白さ、だが全体に新しい芽が出かかっている。

わからぬままに 千葉 小城 勝相

アマゾンでわが著書が一回で売られており「価値」とは何かを考えている

手術して終の棲家を千葉に決む 夢で歩くは雪の銀閣

庭の木に登って見えた全世界 幸不幸など思わざりしを

臨終のときに浮かべるイメージを決めようとして眠れずなりぬ

貧しくて何もなかった故郷を懐かしむ訳わからぬままに

・自問に対してどう答を出すか、それが即ち詩の面白さ。

まぼろし 川崎 篠永 路子

汀には浅く光が揺れている後悔を照らす答えはなくて

飲みこみし流星りゅうせいひとつ喉元で月呼ぶごとく光りておりぬ

眼裏にちらちら光る七色の模様みている眠れないまま

どこにでもありそうでどこにもあらぬそんな古里が絵の中にある

まぼろしを言葉にすれどまぼろしはまぼろしにしてただの暗闇

・肩を怒らせて言葉と格闘するより言葉を宥めることを考えよ。



村野次郎への旅（157）

## 大正期の「香蘭」（十八）

千々和 久 幸

歌）には森山茂等十五名等々である。

例によって巻頭の村野次郎「合歡の花」から見ていこう。

合歡の花

村野 次郎

①籠りつつうらぶれ居れば晝雨にけぶりて

合歡の花咲きにけり

②野のはてに光りしづめる早雲雨なくてすてに久しと思ふ

③玻璃窓に月はのぼれり蟬なく今宵は露のすかしかるべし

④秋づけば水のたまりに傾きてくれなゐうつる鶏頭の花

⑤堀割の船ゆ仰げばはるか高く夕づく街のなりはひが見ゆ（舟遊の日）

⑥橋の下を船はくぐれり潮にむきて発動機の音しきりにするも  
いずれの作品も現実を忠実に再現すること

に、苦心のあとが見える。白秋の作品も同じ技法だったが、現実の光景（把握）が時に現実の向こう側に浮上するところにロマンの匂いがした。一方で村野先生の作品は、後年はこの現実の把握に余裕と広がり加わり、作品に膨らみが出た。

さて①の歌、眼目は「うらぶれ居れば」である。例によってその訳には踏み込まない。

となれば「うらぶれる」を讀者は「落ちぶれて、みすばらしい様子になる」（広辞苑）と理解してしまいが、むしろここでは「心の拠り所がなく力を落とす。憂えしおれる」（同）と詠んだ方が解り易い。

雨の日を一日家に籠もり、合歡の花に降る雨を寄る辺なく見ているというのだ。どうにも鬱陶しく、遣り切れない思いなのだろう。

②はそんな状態から目をあげ、遠景をほんやり眺めながらふと昨今の空模様にも思いを馳せている、という構図。紛らわしいのは「早雲雨」のルビの振り方。原作では「早雲雨」の三文字に振られているが、正しくは「早雲」＋「雨」だろう。辞書には「日照り雲」となっており、「日没の頃、夕焼けのように美しく紅色に染まった巴（ともえ）の形の雲。天候が定まるしるしという」（広辞苑）とあ

「香蘭」第四卷第九號（大正十五年＝1926年九月號）は、遅滞なく同年九月一日に発行された。表紙畫及び題字そして裏畫も前號と同じく北原白秋である。総頁は56頁で、誌面はこのところ固定した編集で安定している。奥付にも異同はない。

目次から主要な誌面を拾えば、巻頭の短歌欄には村野次郎、穂積忠、池上秋石、橋本政一、本間樂寛、冬野木枯、南部松若丸、川村浩、東朱雀、南草萌、鈴木幸哉、橋本俊夫、清原齊、島田旭彦、今井嘉雄、深野庫之介、酒井廣治、杉浦翠子の十八名。

次いで杉浦翠子のエッセイ「こと葉の吟味」が五頁半、次の短歌欄は石野古情、芥子澤新之介、横山信吾など十一名。

続いて橋本敏夫のエッセイ「象徴論」が四頁、そして長月集（短歌）は佐藤達夫等十一名。さらに前月歌壇合評を挟んで月光集（短

る。原作の「旱雲」は先生の趣向か好み、と読んでおきたい。

内容的には「晝雨」から昨今の空模様への連想で、いくぶん①の気分が揺曳している。

わたしは少年期を田園に囲まれた田舎で過ごしたが、「旱雲」という呼称に馴染みがない。

③の歌、「玻璃窓」はガラス窓、「蟬」は「昆虫カマドウマの異称」とある。辞書に竈馬は「キリギリスやコオロギに近縁であるが、翅はない。後肢は強く、跳躍に適し、触角は非常に長い。暗所に群生し、台所などにも出る」とある（広辞苑）

先にわたしは「少年期を田園に囲まれた……」などと書いたが、この「蟬」も記憶にない。いったいわたしは周辺の自然に親しむことがなかったのかと、今にして思う。虫の声はよく聞いたが、一々聞き分けるほどの関心はなかったのだろう。

村野先生も少年期は田舎暮らし（北多摩郡多磨村）だったが、わたしなどよりも遙かに自然の草花や昆虫に親しみ、感受性を磨かれたことがよく解る。今さらどうにもなるものではないが……

作品に戻れば、「月」+「蟬」=「露すかし（すがし）」という構図（因果関係）が、わた

しにはいかにも詩人の発想らしく映る。恐らく自然に親しんでいる人々には、この構図は周知のことだったのだろう。

④の歌、鶏頭の花を直写するのではなく、水に迂回させて詠んだところに面白味がある。初句の「秋づけば」には太陽の位置が微妙に把握され、自ずからなる季節感が窺える。

「水のたまり」は雨後を思わせるが、「くれなゐ」まで肉眼で判別出来るかどうかは、断定し難い。むろん鶏頭の側からの視線だから、詮索無用だろうが！

⑤の歌、前四首までとは場面が変わって、別の日。ここでは船遊び途上の囑目である。堀割だから地上より一段低い場所からの視野である。そこからは夕づき始めた街が、普段とは違った様子に見えたのだ。

先生らしいと思ったのは、「街のなりはひが見ゆ」という概念的な把握である。「なりはひ」の具体は言わない。雰囲気であるいは想像力で感受せよというのだ。こう突き放されると、堀割を滑って行く船から、夕づき始めた「街のなりはひ」が彷彿と起ち上がってくる。不思議な歌の力である。

⑥の歌、視覚を遊ばせながら、続いて底ごもるエンジンの音を聴覚が捉える。船が橋の

下を潜ったからだ。目と耳と全身を船遊びに集中していることが解る。

船には一人で乗ったものか、仲間が居たのかは解らない。しかし手には作歌のためのメモがあつたに違いない。

ついでに同欄の同人の作品からアトランダムに引いておく。

身邊拾遺 穂積 忠

露ながら白き粉をふく青柿のかすかに秋はふふみたるらし

・さしなみに子どもをしかる家多しもの聲とほる夏のけうとさ

・子守すと心むなしき母上がひとり語りのこゑのまどかさ

折々の歌 池上 秋石

・ひるねよりさめてけだるし隣家の塀にあふる、紫陽花の花

・遊びより泣きてかへりし幼子を叱りはかねて妻によらしむ

・庭隈に咲きし夕顔あはれなり灯と、かぬ闇にゆれ居り